

# SDGs と子どもの居場所

千葉大学大学院 園芸学研究科 教授 木下 勇



## 1. 持続可能な開発とは？

持続可能な開発とは何か？

外務省のサイトには以下のように記されている。「将来の世代の欲求を満たしつつ、現在の世代の欲求も満足させるような開発」<sup>1</sup>。

！？ 何か変だ。この概念 Sustainable Development は1987年に当時のブルントラント・ノルウェー首相を委員長とする「環境と開発に関する世界委員会」が公表した報告書「我ら共有の未来 (Our Common Future)」で提起された考え方である。

そのレポートでは “that it meets the needs of the present without compromising the ability of future generations to meet their own needs”<sup>2</sup> とある。この意味は厳密には「将来世代が必要とするものを満たすことが可能な条件を損なうことなく、現在必要とされるものを満たす」という開発である。

この “ability” は一般的に能力と訳されるが、この場合は人の能力ではない。できる条件がそろった状態や環境という意味である。この背景にはレポートに書かれているように貧困、食糧問題、環境問題、エネルギー、戦争と平和などの世界共通の課題がある。このままでは世界は持続可能でないという危機から、今、行動 (Action) をと訴えている。つまり将来世代の資源、環境の方が上位にあり、それを脅かさない今の世代の需要を満たすことである。

そう見た時に、我が国の中央政府・行政が推進する持続可能な開発の考え方は的確にその本質を表しているとは言い難い。

## 2. SDGs とは？

SDGs は国連でのこの報告書「我ら共有の未来 (Our

Common Future)」の議論の延長上にある。

1972年開催の国連人間環境会議（ストックホルム会議）において「かけがえのない地球 Only One Earth」が訴えられたことや、同年、ローマクラブが「成長の限界」を報告したことからの、持続可能性の議論はこの時期に国際的に広まった。また1968年にバックミンスター・フラーが「宇宙船地球号操縦マニュアル」を発表したように、既に60年代後半には持続可能性への問いかけが始まっていたとも言える。そして1972年から始まった国連人間環境会議にアドバイザーで関わったルネ・デュボスらによって「地球規模で考えて、地域で行動 (Think globally, Act locally)」というスローガンが唱えられてきた。

環境と開発に関する国連会議は1972年のストックホルムを契機に10年ごとに開催されるようになった。

1992年の地球環境サミットはブルントラント報告書「我ら共有の未来」を受けて、「持続可能な開発」が主要テーマで議論され、ローカル・アジェンダ21が採択された。この地球環境サミットから20年を経て、2012年に再度、リオにて国連持続可能な開発会議が開催された。国連はこの間に持続可能性の観点からの評価指標などを検討してきた。一方、国連では南北格差など国の格差、貧困問題の解消のために、2000年の世紀の転換点を契機に2001年にミレニアムゴールが採択されていた。しかし貧困や南北問題は環境問題と密接につながり、途上国開発問題だけではなく先進国も関わり深い問題であるという議論がくすぶっていた。そして2012年の持続可能な開発会議を契機に、今までの国連の様々なプログラムを持続可能性の評価の枠組みの中に組み込み、先進国もミッションを持って取り組む行動を喚起する「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が2015

年の国連サミットで採択された。そこに記載されているのが、17のゴール・169のターゲットから構成される、SDGs（持続可能な開発目標）である。

貧困、環境、健康、戦争、エネルギー、気候変動、災害など国連の様々なプログラムもこのSDGsの枠組みに位置付けられ、それぞれの関連も含めて、2030年の目標に向けて各国で取り組みが求められている。

### 3. SDGsと子どもの参画

我が国のSDGsの取り組みはどうであろうか？ 我が国では首相官邸に推進本部がおかれてアクションプランが2018年から策定されている。2018年版と2019年版ともそのポイントを以下の3点としている。

- I. SDGsと連動する「Society 5.0」の推進
- II. SDGsを原動力とした地方創生、強靱かつ環境に優しい魅力的なまちづくり
- III. SDGsの担い手として 次世代・女性のエンパワーメント

2020年版もIのみがビジネスとイノベーションが頭に表示されている違いで基本的に変わらない。ここに見るように我が国のSDGsは産業経済の振興が中心である。

これは国際的な議論の中心とかなりズレたものである。

もとより、京都議定書、パリ協定など気候変動に対する国際的協調は大国のエゴによって足並みが揃わず、その温室効果ガス削減目標ですら達成が危ぶまれている。

そういう状況であるから、スウェーデンの15歳の少女、グレタ・トゥーンベリが「気候のための学校ストライキ」を起こし、スウェーデンの国会前で座り込みをした行動が世界に共感と波紋を投げかけた。国連気候変動会議で世界のリーダーに向けて放った演説は、まさに持続可能な開発の定義に反して将来の“ability”が脅かされる不安からのまっとうな訴えのように映る。

思い起こせば、そんな子どもからの訴えは1992年のリオでの地球環境サミットでも評判となった。当時12歳であったセヴァン＝スズキ他カナダの環境サークルの子どもたちが、世界のリーダーを前に、環境問題はあなたたちの責任だと、やはり純粋な怒りから来る演説をした。

この間四半世紀。状況はよくなるどころかますます深刻となっている。経済成長、飽くなき富の追求をする一部の者の論理で将来の“ability”が脅かされては持続可能ではない。やはり、次世代というからには子どもの声、意見に耳を傾けるべきなのは言うまでもない。

1992年の地球環境サミットでは開催国ブラジルのクリチバでの「ゴミではないゴミプロジェクト」で子どもたちがゴミ削減、リサイクルに活躍する活動も注目を浴びた。

この地球環境サミットと1989年に国連総会で採択され、翌年に発効された子どもの権利条約を背景に、1996年にイスタンブールで開かれた第2回国連人間居住会議（HABITAT II）にて提唱され、子どもの参画を中心とする「子どもにやさしいまち」（Child Friendly Cities）のプログラムがユニセフを事務局として始まった。

会議では“[安定した保有]＝[一定の土地に安心して住み続けられる権利]＝全ての人々に快適な生活を”がうたわれ、「都市ガバナンス」（都市とはここでは市町村の自治体を指す）の重要性が議論された。その都市ガバナンスは子ども、女性も参画する持続可能なまちづくりによるとして、そのための官民連携のグローバルパートナーシップで進める方向が打ち出された。

それを受けて「子どもが幸せであるかどうか、社会が健全で政治がうまくいっているかどうかの証である」という考え方で「子どもにやさしいまちは全ての人にやさしい」というスローガンで「子どもにやさしいまち（CFC）」が始まった。

このプログラムをリードしてきたのはロジャー・ハート（ニューヨーク市立大学教授）を中心としたグループである。ロジャー・ハートはユニセフからの委託で世界中の子どもの参画の事例を調べてきた。その報告にはまさに子ども自身が「地球規模で考え、地域で行動」し、大人をも巻き込んで進めている成功例が数多く掲載されている<sup>3）</sup>。

我が国のSDGsにはこの観点が非常に弱い。最近になってようやく拡大版のSDGsに日本ユニセフ協会の「子どもにやさしいまちづくり事業（CFCI）」との連携が掲載された。CFCIはユニセフのCFCがSDGsの枠組みに組み込まれて、ユニセフ国内委員会（ユニセフ直接

の機関ではなく、先進国に国内法で設置された募金活動によって国連ユニセフ活動を支える）がミッションを帯びて、東日本大震災以外では初めて国内の子ども向けに行う活動である。現在、北海道のニセコ町、安平町、宮城県富谷市、東京都町田市、奈良市においてユニセフから提供されたチェックリストで子どもにやさしいまちの自己評価作業が進められている<sup>4</sup>。ニセコ町ではすでにまちづくり基本条例に子どもの参画がうたわれ、小・中学生まちづくり委員会活動が進められていた。他の自治体でもこの検証作業をしながら子どもの参画が強化されている。このようにさらに子どもの参画をより強化することが、我が国のSDGs施策には必要とされる。

#### 4. 子どもの貧困問題と子どもの居場所

競争原理に基づく新自由主義的考え方が支配的なグローバル化した経済の影響と政策的な判断もあって、終身雇用を基本とした日本の就労の仕組みが崩れ、非正規雇用など不安定な就労につく世帯の増加もあり、貧富の格差が広がり、それは子どもの貧困問題として顕在化した。2016年にユニセフが公表したOECD加盟国を中心とする41カ国の子どもの貧困率ランキングでは日本は貧困率が高いワースト1から8番目であった<sup>5</sup>。2010年にはOECD加盟国34カ国中最下位から9番目であったので、より状況は悪くなっていることを物語る。

SDGsの国際的議論には前述のように貧困問題がある。格差の拡大はグローバル化した経済のまさにマネーゲームで富を瞬時に獲得する者が居る一方、過酷な労働環境ながらも貧しいままの者が居る、という貧富の差の拡大にある。また戦火やテロで孤児となったり、弾圧によって居住地を追い出されて難民状態等、大変な困難にあっている子どもの状態がある。

世界の困難な状況下の子どもの貧困問題のみならず、我が国においても日々の生活に困る子どもたちもいる。筆者がある自治体でインタビューを行った話の一部を以下に紹介する。

「お化け屋敷をやっている中で、お母さんが家に帰ってくるのが朝4時、朝10時にお父さんが帰ってくるといいう家庭があることを知った。お昼の給食だけが食事。親がつかまらない。そこで児童館で子ども食堂の活動をした。そのうちにその家庭の姉弟の弟が中学に入る時のこ

とである。あんなに児童館好きな子が学校に来ていない。制服買ってないかもしれないと気づき、本人とヨーカドーへ行って制服買ってあげた。だが、お姉さんも不登校になって高校に行けなかった。その子たちのお母さん、子ども産んだのが17歳の時。そのお姉さんも17歳の時に子どもを産んでその父親には逃げられてしまった。弟は今は配管の仕事をして、社長がかわいがってくれて、結婚して子どもも授かって家庭を築いている。」

実はこの方はこの姉弟の支援をずっと行ってきた。子どもたちはこの人に出会わなかったらどうなっていただろうか、とも考えさせられる。

行政施策では子育て支援や児童相談所などの相談窓口がある。しかし「待ち」の姿勢では、支援を必要とされる子どもたちにつながらない。

子ども食堂が子どもの貧困問題の深刻化とともに広がってきた。しかし、子ども食堂を始めた関西のある地域での話である。「ウチは貧困地域でない！」と苦情が地域から寄せられ、やむをえず閉鎖せざるを得なかったという。

子ども食堂はそのような世間の受け止め方もあり「だれでも食堂」というような名称に変えているところも少なくない。

実際、当事者に聞くと、子ども食堂を開いても、貧困家庭の子どもに直結するわけではない。貧困でない「普通」らしき家庭の子どもらが集まる。その誰もが来ている中で、必要とする子どもが入ってくるのを待つというような構えである。そして実は「普通」らしき家庭の子の中にも、金銭には困ってなくても親からお金を渡されてファミレスで毎回夕食を食べていたり、朝はコンビニで買うというような家庭の子どもたちがいる。その子たちも温かい食に引きつけられてきているという。経済的な貧困のみではない。家庭の食卓の貧困がある。これは女性も労働力市場にかり出され、非正規雇用で夫婦ともに稼がないとやりくりできない、今の実情なのだろうか。いわば広い意味での子どもの貧困問題か、または親の子育てや家庭教育の価値意識やストレスにも関わる「心の貧困」問題か、それぞれのケースがありうるだろう。

言えることは貧困が表面上は見えない、不可視化して



いることである。かつて高度経済成長が始まるまでの時には貧困は恥ずかしいことではなかった。それぞれの家庭の様子はあからさまで、お互い助け合う文化があった。子どもは地域の子として、貧富の差なく、地域で遊び育つ相互の関係があった。これは見えない人間関係の網の目が作用していたことで、社会関係資本ともいう。しかし今は貧困が恥ずかしいことのように受け止められ、支援を必要としても救いを求めない意識が働く。そのように貧困が見えなくなっている。その犠牲となるのは子どもである。

かつてあった子どもの救済や地域で子育ての人間関係の網の目の社会関係資本が崩れている。それゆえにNPOやボランティアの志ある人たちによって子ども食堂などの居場所が新たなセーフティネットの仕組みとして必要とされている。

## 5. 遊びと居場所～室内化する遊び

学校と家庭以外に子どもの居場所となるのは、子ども食堂のみならず、児童館、図書館、公園など様々な施設がある。だが前述のように場所だけ提供すれば居場所となるかというところだろうか。もちろん、子どもによってはムシャクシャした時に必ず行く、気持ちがすっきりする場所など特定の感情、愛着を感じる場所を持っているかもしれない。だが多くの子どもたちは小学校高学年から部活、塾・習い事でほとんどの時間を過ごす。むしろ部活などに入らない子どもたちが街でたむろしていると白い目で見られる。

最近では習い事が低年齢化して、小学校低学年時からプログラムに組まれた放課後の時間を過ごすという子どもたちが増えてきた。これは保護者側が、子どもを放っておいたら不安で、子どもの成長のために何か身に付くものをと、不安感と焦りから、さらに周りにその傾向があると「ウチの子も」と同調することがその勢いを強めている。

筆者らの研究室で行った最近の調査において、都市、農村部のいくつかの自治体の小学校において1年生から6年生までの全クラスにアンケートを行った結果、平日に外遊びをしない子どもが最高で8割（都市部）、最低でも6割（農村部）はいるという実態であった。個別のインタビューには「家の中の方がいい」、「なぜ外で遊ば

なければいけないの？」と答え、外で遊ぶ意欲すら失われているようである。

子どもが外で遊ばないということと引きこもりの増加の因果関係はあるのだろうか。子どもが室内にこもり、ゲームのバーチャルな世界に居場所を求める傾向が増長されたらどうなるのであろうか。国のSDGsのトップにあるSociety 5.0の世界、IoTとAIによる世界を子どもたちは敏感に感じて先取りしているものであろうか。それは本当にSDGsにつながるであろうか？

## 6. 自己を形成する居場所としての遊び場

居場所とは何か？ 様々な解釈があり統一された答えはない。自分が居場所と感じるという主観的なものであるから。よく「自分らしくいられる場所」という説明がされる<sup>6</sup>。

自我形成期以前は身体的にも好奇心、欲求を思いっきり弾き出す遊び場が居場所となるであろう。奥野健男は自己形成空間として「原風景」という言葉を提起した<sup>7</sup>。文学作家の作品にはその作家の原風景が反映されているという。近代文学の作家の原風景に原っぱと隅っこの像を読み取り、それは縄文期にも通じると論じた。

発達心理学者のピアジェは子どもの発達段階において遊びのように好奇心など内的欲求から外界に働きかけ、その反応を受けて、行動の羅針盤となるような内的な世界観の図式（シェマ schema）を形成するという「同化」と「調整」の応答関係の構造を示した<sup>8</sup>。原風景はそのシェマの根っこに相当するようなものかもしれない。

「巣に座るものから巣立つもの」へと自立が一番長いのが人間である<sup>9</sup>が、巣立つ過程は自分の居場所を外にも増やしていく過程ともいえる。巣の外側に自分の場所を見つける、またはつくる衝動は子ども期には秘密基地づくり、秘密の場所といった遊びの行動で表れる。自分だけの秘密の場所、むしゃくしゃした時に気持ちがすっきりする場所、時間が過ぎるのを忘れるぐらい熱中して遊んだ場所、ぼーっとのんびりできる場所など、その場所は自分の存在が外的世界に包み込まれ関連づけられる場所である<sup>10</sup>。

遊びがなぜ重要かについては、前述のピアジェの発達心理学以外にも動物行動科学や脳科学、犯罪心理学等の成果でかなり明らかになっている。スチュアート・ブラ

ウンは猟奇的殺人事件の犯人等6,000人以上の犯罪者の幼少期に遊びの体験が不足し、遊びは人格形成に大きな影響を及ぼすことを実証した<sup>11</sup>。遊びを抑制されて成長したハムスターは社会的敗北から立ち直れないということが報告されている<sup>12</sup>。ブライアン・サットン・スミスが「遊びの反対は仕事ではない。抑鬱である」<sup>13</sup>と言ったことと重なる。つまり子ども期に外で遊ばないことは、引きこもりの増加につながるのではないかという前述の問いは仮説として成り立つかのようである。

## 7. 思春期の居場所としてのユース（プレイ）ワーカー

前述のように子ども期の遊びは人間の発達の基本的な行為であり、遊び場は自己形成の居場所となる。何かにチャレンジして達成した喜び、与えられたものではなく自らの興味と関心で自ら創り出す経験こそが自分をつくりあげていくアイデンティティ形成の礎となる。

思春期はいわば自身を客観的に見るもう一人の自分が現われ、アイデンティティ・クライシスに出会って初めて「自分は何ものか？」とアイデンティティを考えるものである。大人への背伸びと無意識的に行動していた子どものままの自分の葛藤は「理由なき反抗」のように親や社会への反抗となって現われることもある。

家庭と仕事場の往復では人生味気ないと、それ以外にある自分の居場所をサードプレイスという。オールデンバーグの提唱でアメリカでカフェと本屋、ソファ、ステージなどがあり長時間いられる場づくりが広がってきた。そこではステージでの表現も可能で、人がつながる場ともなる<sup>14</sup>。その広がりによって子どもの居場所は子どものサードプレイスとも言われるようになっていく。

ゆったりとした時間の流れに任せてぼーっと物思いに耽ることができる。そういう場所を必要としているのはTime is Money と時間に急ぎ立てられて働き、ストレスの多い大人のみではなく、同様のストレスを受ける今の子どもにも必要となっている。

自分らしさ、アイデンティティはそのようにゆったりと物思いに耽るのと同時に、自分を社会に映しながら、時に葛藤を起こしながらも自分を対象化して見る過程を経て、つかんでくるものである。それは時に親や教師以外の他者の存在が自分を映す鏡のような役割を果たす。

子どもにとって居場所とは単に空間のみではなく、自分らしさを認めてくれるような人がいる場所を意味するのではないだろうか。それは子どもが社会参画する基盤となる場所ともなる。

欧米では思春期の子ども・若者の居場所としてユースセンターが設置されている。我が国では1997年の神戸連続児童殺傷事件を契機に中高校生の居場所を整備するところが現れてきたが、一自治体に一館という整備状況である。それよりも身近な生活圏にある児童館を小学生のみではなく、中高校生に開く傾向も見られる。また図書館も居場所となるようにカフェやスタジオなども併せ持つ整備もみられる。武蔵野プレイスといった評判の施設はまさに子どものサードプレイスのようである。

だが日本では空間の整備に巨大投資をする一点豪華主義で、子どもの行動圏への水平的展開、そして専門職を配置する人材への投資が弱い。それが財政的な理由であれ、本来の持続可能性を考えた場合に単に施設整備のみではなく長期的な経営戦略が必要である。

海外のユースセンターや冒険遊び場を見ると、子どもの居場所には個性的なユースワーカー、プレーワーカーの存在が大きい。特に居場所を必要としている子どもには、そういう専門職の存在が欠かせない。カタカナの新しい職が雇用の場として定着しないのが、我が国の社会である。インキュベーションは民間の産業では持続可能な開発の上でも重要である。しかし行政においては非常に保守的で官僚制が障害となって、時代の変化にあったイノベーションができていない点が課題である。それならば後述するように民間と協働する仕組みを考えることである。

室内化する我が国の子どもたちの遊びの現状を見るに、外遊びに誘引し、遊びから主体性を育むようなプレーワーカーのいる遊び場（冒険遊び場、プレーパークまたはプレーバスのような移動式遊び）、そして中高校生にとっては個性的な経験を有するユースワーカーがいる居場所が必要であろう。そしてこれらの専門家が聞こえない子どもたちの声を拾い上げ、未来を安定したものへと社会を変えていく媒介となること。そういったカタリスト（触媒）となる専門家の養成と専門職能としての雇用の場を確保していくことが我が国の子ども参画のSDGsに必要なことである。



世田谷で始まった冒険遊び場 羽根木プレーパーク



子ども参画でつくり子ども参画で運営する子どもセンター「ライツ」(石巻市)



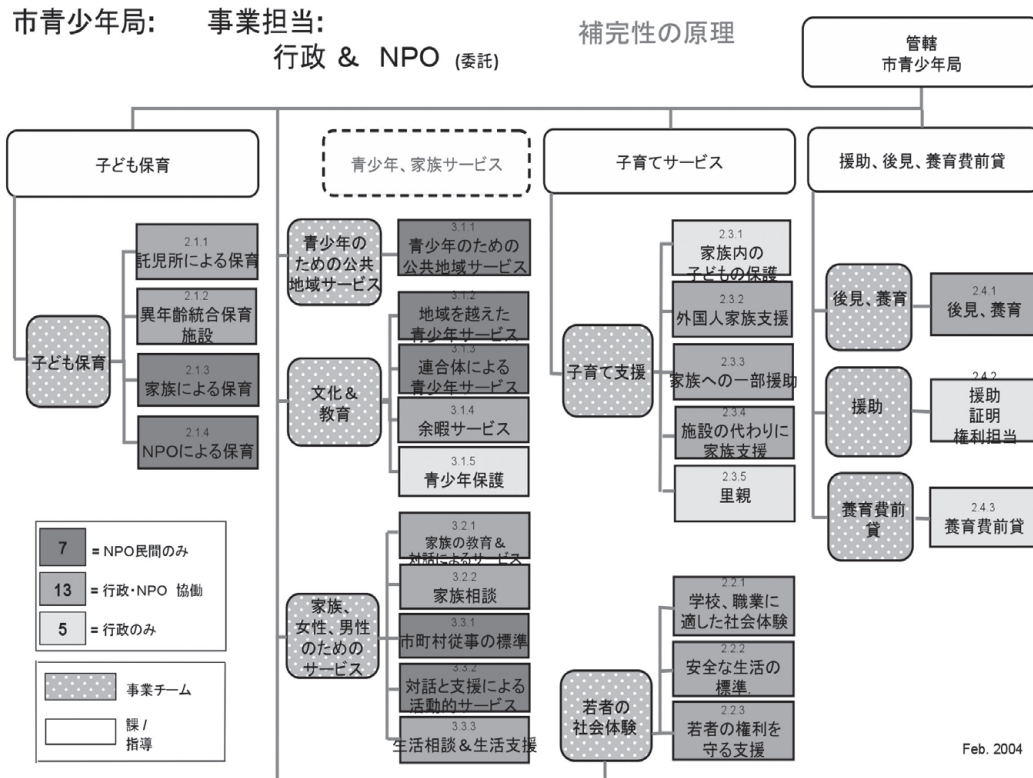


図1 ミュンヘンの青少年局の事業担当にみる補完性の原理

## 8. パートナリシップで居場所づくり

ドイツの青少年福祉の法体系では、青少年福祉は多様な主体によって担わなければならない、行政はNPO（ドイツではe.V.がつく登録協会）など民間と協働して施策を進め、民間に委託しなければならないことが定められている<sup>15</sup>。実際、ドイツのミュンヘンの青少年局の構成を見ると、各施策の系の事業は赤・橙・黄（図では網掛け濃い、中間、淡い）で色分けされ、民間への委託が赤（濃い網）で、民間との協働が橙（中間）、行政のみが黄（淡い網）となっていて、行政のみの黄（淡い網）がいかに少ないかわかる（図1）。

これは「大きいものが小さいものができることを邪魔してはならない、できないことを補完する」という補完性の原理による。この補完性の原理は中世のキリスト教会の中央と支部の関係の原理として考え出されたものであるが、ヒトラー政権の全体主義化した戦争の反省から、戦後により強化されて、徹底した地方分権の原理ともなり、それが行政と民間との協働の原理として、そして今日のEUの原理ともなっている。

これはまたドイツ社会で子どもと大人の関係の原理として子どもの育成にも浸透していることがわかる。子どもが発達の自然的、自発的な欲求で遊び、社会に関わり、社会に参画する機会を保障していくために、何を大人は補完しなければならないか、それを考えるNPOの活躍が見られる。そこにプレーワーカー、ユースワーカーが子どもの居場所をつくり、カタリストとして子どもの社会参画を補完している。

SDGsの17番目はパートナーシップでの推進である。我が国でどのように子どもの居場所を築き、子どもが遊び、社会へ主体的に関わり、SDGsの協働の担い手となっていくか、自治体の政策が問われる。

注

- 1 <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/kankyo/sogo/kaihatsu.html> 外務省 持続可能な開発 2020.2.14閲覧
- 2 Gro Harlem Brundtland, et.al.(1987) the World Commission on Environment and Development "Report of the World Commission on Environment and Development: Our Common Future" 3. Sustainable Development, 27. <https://sustainabledevelopment.un.org/content/documents/5987our-common-future.pdf>
- 3 ロジャー・ハート (IPA日本支部訳, 2000) 『子どもの参画』 萌文社
- 4 <https://www.unicef.or.jp/cfc/index.html> ユニセフの子どもにやさしいまちづくり事業 2020.2.14閲覧
- 5 ユニセフ イノチェンティ研究所 (日本ユニセフ協会訳, 2016) イノチェンティレポートカード13 『子どもたちのための公平性』 先進諸国における子どもたちの幸福度の格差に関する順位表、日本ユニセフ協会
- 6 例えば、<https://kinarino.jp/cat6-ライフスタイル/34836-自分らしく居られる場所%E3%80%82「サードプレイス」を探してみませんか>
- 7 奥野健男 (1972) 『文学における原風景 原っぱ・洞窟の幻想』 集英社
- 8 ピアジェ, J. (波多野完治・滝沢武久 訳, 1960) 『知能の心理学』 三和書房
- 9 ポルトマン, A. (高木正孝訳, 1961) 「人間はどこまで動物か」 岩波書店
- 10 木下勇 (1996) 『遊びと街のエコロジー』 丸善
- 11 Stuart L. Brown, Consequences of Play Deprivation, [http://www.fa-sett.no/filer/Consequences\\_of\\_Play\\_Deprivation-Stuart\\_Brown\\_MD.pdf](http://www.fa-sett.no/filer/Consequences_of_Play_Deprivation-Stuart_Brown_MD.pdf), 2019.11 閲覧
- 12 Cody A. Burleson, Robert W. Pedersen, Sahba Seddighi, Lauren E. DeBusk, Gordon M. Burghardt, and Matthew A. Cooper, Social Play in Juvenile Hamsters Alters Dendritic Morphology in the Medial Prefrontal Cortex and Attenuates Effects of Social Stress in Adulthood, Behav Neurosci. 2016 Aug; 130(4): 437-447.
- 13 Brian Sutton-Smith, Ambiguity of Play Harvard University Press, 1996
- 14 オールデンバーグ, レイ (忠平美幸訳, 2013) 『サードプレイス』 みすず書房
- 15 [https://www.gesetze-im-internet.de/sgb\\_8/BJNR111630990.html](https://www.gesetze-im-internet.de/sgb_8/BJNR111630990.html) Sozialgesetzbuch (SGB) - Achtes Buch (VIII) - Kinder- und Jugendhilfe - (Artikel 1 des Gesetzes v. 26. Juni 1990, BGBl. I S. 1163) 2020.2.14 閲覧

Profile 木下 勇 (きのした いさみ)

千葉大学大学院 園芸学研究科 教授 工学博士 (地域計画)

東京工業大学で建築を学び、1980年からワークショップを活用した住民参加のまちづくりを進める。日本学術会議連携会員・子どもの成育環境分科会会長、日本ユニセフ協会子どもにやさしいまちづくり事業委員会会長として子ども参画のまちづくりを推進。著書に『ワークショップ～住民主体のまちづくりへの方法論』(学芸出版)、『アイデンティティと持続可能性』(共編著、萌文社)など。日本都市計画学会石川賞、日本建築学会教育業績賞 (2017)、グッドデザイン賞 (2017)、日本建築学会教育貢献賞 (2018) など受賞。